全学共通科目のねらい

基礎ゼミナール

理工学研究科・教授
青塚　正志

平成17年の首都大学東京開学に先立って、基礎ゼミナール教育準備チームが発足し、導入プログラムとしての基礎ゼミナールの実施に向けて、検討が開始された。基礎ゼミナールは１年次前期の全学共通必修科目であり、最初に都市文明講座の受講と、その後の少人数に分かれてのゼミナールから構成される。ゼミナール部分は次のようなねらいと内容で行われる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《ねらい》

・受動的学習姿勢から能動的学習姿勢への転換
・課題解決に必要な技法の体験的習得
・豊かな人間関係の形成

《授業内容》

・表現力やプレゼンテーション能力を向上するための調査、口頭発表、レポート作成などの実施。
・多様な価値観の認識や豊かな人間関係の形成を促すための共同研究や討論を中心とした授業。方法については、各教員がテーマに応じて計画。

（第１回基礎ゼミナール教育準備チーム会合資料より）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

受講生は、合計78クラス(H19年度開講実績)のゼミナールから、自身の所属・専門にとらわれることなく、興味深いテーマを選択する。担当教員は、特定の専門分野についての基礎知識の解説が本ゼミナールの主目的ではないという認識のもとに、受講生が取り付き易く、かつ討論や調査へスムーズに発展していくことが期待されるテーマを用意する。以下に、H19年度に開講された基礎ゼミナールのテーマからいくつかを紹介する。

ITとビジネス
循環型社会と廃棄物処理
リハビリテーションの視角：リハビリテーションマインドとは何か？
人類の起源とアフリカ：原始と近現代をむすぶ
シミュレーションで社会に触れる
グループワークのちから：チームのなかの役割・援助関係・相互作用から
思想と科学の「古典」にどうアプローチするか
身近な交通問題から都市と交通のあり方を考える
“中華”を分析する
循環型社会におけるものづくり
宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む
夢（？）の化学物質　－登場と終末－
老化と寿命
大学生のストレス
青年期の自己と他者の心理
身近な物質の物理化学
子供の健康

テーマが非常に広範な分野にわたっていることがお分かりと思う・総合大学としての首都大学東京の長所が最大限に活かされているといえよう。

首都大学東京の基礎ゼミナールの特色や意義を確認・評価するために、他大学でも「基礎ゼミナール」という名の科目が開講されているか、それらはどのような内容で実施されているのかをインターネットで検索してみた。その結果、直ちに20大学ほどがヒットし、検索を丹念に行えば基礎ゼミナールを開講している大学数はさらに増えるものと思われた。20の大学について、HP上に公開されているシラバスから、ゼミナールの趣旨・目的、授業方式を確認してみた。「基礎ゼミナール」という科目名が示すように、履修年次は他大学においても1年次がほとんどであった。クラスあたりの受講者数は必ずしも明確ではないが、多くの大学で15～20名程度と思われた。いくつかの大学においてHP上で公開している基礎ゼミナールの目的、趣旨を紹介する。

A大学（全学）　基礎ゼミナールの達成目標

・自主的な学習態度を獲得すること
・課題発見能力を高めること
・資料（情報）の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること
・基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること
・学生と担当教官、および学生相互におけるコミュニケーションの場を作りだすこと。

B大学（情報コミュニケーション学部）　基礎ゼミナールの目的は、第1に、各担当教員が設定したテーマを中心に学習する中で、大学生として身につけるべき、論理的思考、資料の収集・分析、論文・レポート、プレゼンテーション、ディベート等の技法について修得すること

です。第2に、現代社会における情報とコミュニケーションに意義と機能を知り、学生各自の問題関心を高めることです。

C大学（法学部）　大学生として、さらに社会人としての基礎となる一般的な知識・教養を養います。基礎的な漢字や計算をはじめ、インターネットを含めたパソコン操作、法律に関する基礎知識、時事問題などをテーマにした講座を設定しています。

D大学（文学部）　文学部では大学生活のみならず、社会生活において必要不可欠なルールの身体的習得と、それによるコミュニケーション能力向上を目指す「基礎ゼミナール」を開設しています

E大学（経済学部）　基礎ゼミナールとは、簡単に言えば、ホームルーム＋「読み・書き・討論」塾のようなものです。

各大学とも少人数ゼミであること、大学での勉学姿勢の基礎作りと、そのための技法の習得、という趣旨・目的を掲げているが、その点は、本学の基礎ゼミナールと共通している。しかし、首都大学東京の基礎ゼミナールは他大学で実施されている同名科目とは明瞭に一線を画している。

検索でヒットした20の大学の基礎ゼミナールは、A大学を除いて、学部あるいは学科科目（特定の学部、学科が、当該所属の学生を対象に開講している科目）である。唯一A大学で全学科目ではあるが、ゼミナールのクラス編成は学部ごとに行っている。すなわち、今回ネット上で調査したすべての他大学の基礎ゼミナールでは、首都大学東京の同科目とは異なって、各ゼミナールクラスは同一所属の受講生から成り、当該学部・学科所属の教員が担当していることになる。このような実施形態のゼミナールでは、その分野の基礎知識を効率よく習得させることを目的としたテーマ設定がなされているだろうから、専門課程の勉学の前段階としてはきわめて有効だろう。教員も、他講義科目とは大きく変わらない取り組み方で担当可能である。

一方、首都大学東京の基礎ゼミナールの目的・趣旨に、特定分野の基礎知識を習得させることは盛り込まれていない。もちろん、あるテーマについて討論や調査を行う際には、担当教員による基礎知識についての解説は必須で、受講生もそれを理解しなくてはならないが、それらがゼミナールの主目的ではない。

本学の基礎ゼミナールは、他大学の基礎ゼミナールにも共通する学問姿勢の涵養、調査・発表技法の習得に加えて、多様な価値観の認識、豊かな人間関係の形成をその目的に掲げており、この点において他に例を見ない。文系、理系を問わず所属の異なった学生が一つのテーマのもとに集って討論、調査を行うことによって、これらの目的が達成されることを期している。そのためには、ゼミナールのクラスが特定の所属の学生に偏らないことが大前提となり、学部・学科毎にクラス編成を行う他大学の基礎ゼミナールの対極に立つものである。担当教員が専門的に過ぎないようテーマ設定に工夫を凝らしていることが上のテーマ紹介でお分かりだろう。

現代社会で希薄になりがちな、多様な価値観の認識や、豊かな人間関係への関心は、将来を担う若者にこそ身に付けてもらいたいことである。これらを趣旨・目的に掲げている首都大学東京の基礎ゼミナールは、他大学の模範となりうる可能性を秘めた科目といえよう。しかし、H17年度開講当初は、教員に趣旨・目的が十分に浸透しておらず、通常講義とは異なった実施形態への戸惑いのために、学生の授業評価結果は惨憺たるものであった。その後、基礎教育部会での基礎ゼミナール実施上の問題点の検討、担当教員の努力によって改善傾向にはあるが、FD活動などによるいっそうの改善努力が必要であろう。

特色ある本学の基礎ゼミナールが、「言うは易いが行うは難い」の典型として企画倒れで終わってしまってはならない。専門課程の前段階としての基礎知識の習得を中心に据えた他大学の基礎ゼミナールに比べて、本学の基礎ゼミナールの趣旨達成は確実に難易度が高いが、それだけに、本学教員の力量が試されているともいえよう。